

オピニオン

日本統治下の南洋群島で「国産」のコーヒーづくりを目指した男たちの物語を書きたいと思う。

『南洋珈琲』（※会社表記は「コーヒー」とも）株式会社という企業が、昭和13（1938）年刊の『南洋関係会社要覧』に掲載されている。設立は大正15（1926）年、本社は大阪市、社長として「住田多次郎」の名があった。

事業内容は「珈琲ノ栽培製造販売」。支社が南洋群島サイパン島の中心街ガラパンにあり、南の小島・ロタ島にも進出する。

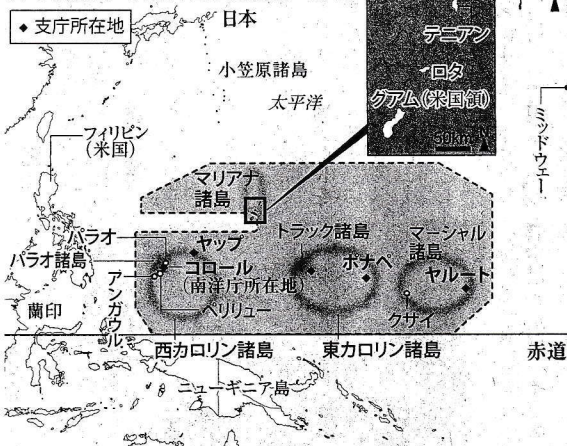
同社相談役に、南洋興發（南興）社長で「シユガールキング」の異名をとった松江春次が名を連ねているから、南方で手広く事業を手掛けていた南興も同社に関わっていたのだろう。

南洋群島で日本人がつくるコーヒーは実際にどれほどの規模だったのか。南洋の「コーヒー・ドリーム」は成功したのか？

昭和9年の『我が統治地南洋群島案内』にある「南洋珈琲」の項を見てみよう。『大正15年にコーヒーの植付けを為し、目下約八千俵の生産を為しつつあり千俵の生産を為しつつあり国産コーヒーとして注目されている』。コーヒー栽培のためにサイパン島で約200町歩（※1町歩は1000坪）を耕作し、約7千坪の工場を有している。隣接の

ロタ島に約200町歩の土地賃し下けを受け、《近く同島に拡張耕作を為すことになつてゐる》とあった。公的な『南洋統計年鑑』（同刊）も、南洋群島における「珈琲」の作付面積は日本統治が始まった大正11年から昭和9年までに約3倍に増加した、と書いている。そのほとんどがサイパン支庁内（サイパン島、ロタ島）だが、パラオ、ボナペの両支庁内でもつくられている、という。

日本統治下の南洋群島（戦前・戦中）



南と北の島物語

【35】

資料や統計だけを見れば、南洋群島におけるコーヒー事業は「前途有望」だったと見えなくもない。

「国産」目指した男では『南洋珈琲』の社長を務めた住田とは、どんな人物だったか。南洋よりも先に住田が進出した『布哇日本人銘鑑』（昭和2年）に記載がある。

明治15（1882）年、広島県出身。小学校卒業後、ハワイへ渡り、叔父経

日本人が夢見た「南洋コーヒー」



日本統治時代のロタ島の街の風景。大西喜代一氏提供

ロタ島 太平洋ミクロネシアの北マリアナ諸島にある小さな島（面積約86平方キロ）。チャモロ人ら先住民に加えて、大航海時代の16世紀以降、スペイン、ドイツが入って島を支配。第一次世界大戦（1914～18年）の後、日本の統治（国際連盟による委任統治）が45年まで続いた。現在の人口は約1500人。サイパン、テニアンなどとともにアメリカの自治領「北マリアナ諸島連邦」を構成している。

営の商店に勤めた後、住田商会（後に住田物産）を設立して独立。酒造業などを手掛けて、《顕著なる成功を勝ち得て巨万の資産を作った》という。

この立志伝中の人物が興した事業のひとつがコーヒー事業だった。ハワイ産のコーナ・コーヒーの販売を手掛けていた住田は新天地を目指し、ハワイ時代の部下とともに「南洋珈琲」を創設する。後には、やはり日本統治下にあった台湾での栽培にも乗り出す。

目指すは「南洋の国産」コーヒーだ。当時、日本人のコーヒー嗜好は高まっていたのに、豆の多くをブラジルなどからの「輸入」に頼っていたからである。

余談をひとつ。日本で初めて「コーヒー牛乳」を製品化した会社のホームページ

によれば、コーヒー牛乳の誕生には、ハワイのコーナ・コーヒーを販売していた住田が「役を買っていた」という。話がそれた。

作家が見たロタ島

ロタ島は、サイパンとテニアムのほぼ中間にある伊豆大島くらいの小島だ。

一時、無人化したが、日本統治下で製糖業や燐鉱業のほか、コーヒーやカカオ栽培などが行われ、昭和12年の邦人人口は7千人近くに増加。これに伴い、日本の統治機関・南洋庁が同年8月、ロタ島に出張所を設けたほどだ。

南洋群島への日本人移住者向けのガイドブック『南洋群島移住案内』（18年版）もロタ島を「イチ推し」に挙げている。『昭和十五年度まで三千三百町

歩を開拓するべく企画（略）本島は群島中珍しく水の豊富な島で農場の如きは既に水道を利用・新興口々として飛躍的發展を予想されている』。まるで「バラ色の未来」が約束されているかの書きぶりだが、その少し前、島を訪れた作家の紀行文も紹介しよう。10年に南洋群島を訪れ、ロタ島にも渡った放浪作家、安藤盛の『南洋記踏査紀行』（14年）だ。南洋群島は3度目の安藤も交通の便が悪いロタ島へ渡るのは初めて。安藤は、南興社員の案内でサイパン・テニアン・ロタへと汽船を乗り継いで向かう。

ロタ島のイメージといえば『鹿と猪の住む荒地』『太平洋上の孤島』『中央に千四百五十尺（約440メートル）の高峰がある』。そして、安藤の関心はコーヒーよりも、南興による砂糖（製糖工場）にあつたらしい。『南洋記』には『（南興は）サイパン、テニアン島を開拓し、今度、新たにロタ島の開発に手をつけた。無人島であったロタから砂糖を産出しようとしている（略）私は何としてでもロタ島に渡ってみたいと思ったのだ』

では、肝心のコーヒーは……といえは、記述はそっくりない。『一軒の家が林をまばらに開墾した中に立っていた。そこはコーヒーを栽

培する会社だった。日本に輸入されている南米あたりのコーヒーを防止すると、意気盛だ高かった』と書きつつも、コーヒー栽培があまりに小規模なことに安藤は言葉を失う。『悲壯な力カチア（※戯画）に涙さへあふれて来る』

「味」にも容赦がない。『南米コーヒーよりも、もっと粗悪で、その香気さへ低い』。その上で『猫の額の広さの島でやっている人々の気持ちを汲んでやらねばならなかった。彼らの、涙ぐましい努力に最大の敬意を捧げつつ』と最後は「同情モード」だ。

成功を見ずに終戦

安藤はコーヒーへの関心のなさも手伝って厳し過ぎるようにも感じる。では実際にはどうだったか？

結論から言えば、南洋群島における「国産」コーヒーの夢は、事業として大成したとはいえない。戦火が激しくなり、そのままと戦を迎えてしまう。戦後、コーヒー畑は放棄された。ところがだ、このままじや終わらない。日本人が植えたコーヒーは「健気に」も「生きながらえていた」のである。その「奇跡」が南洋産コーヒーの夢をつなぐ。続きの物語は次回……

敬称略 喜多由浩

（編集委員） 隔週掲載

 オピニオン

戦前から日本統治下の南洋群島で行われた「國産」コーヒーの取り組みは終戦にかけて、どんな経緯をたどったか？ 南洋庁編「南洋群島要覽」の記述を見てみよう。昭和13（1938）年版「農業」の欄に『珈琲』の項がある。

『將來相当有利の事業たり得る見込み：昭和三年度より珈琲栽培に對し奨励金を下付し斯業の発達を図ることとせり』と「明るい未來」が書かれている。ところが、奨励金の交付額や受給人員は年々、減少。年度別推移表によれば、8年度の日本人の受給人員が178人、金額は約4400円だったのに対し、12年度はわずか2人に減り、金額も1100円ではない。

15年版『南洋群島要覽』になるとコーヒーの記述は「わずかになり、17年版では消えている。南洋群島では、米軍による侵攻が近づき、サイパンでは、19年の初めから日本人の本土疎開が始まり、同年7月、日本軍が玉砕。島内は壊滅的な被害を受けた。コーヒー農園もしかりである。

離れたロタ島は比較的、被害が少なかった。「南洋珈琲株式会社」がサイパンの次に進出し、コーヒーを栽培した、あの小島である。そのことが、約80年後に人々が持ち込んだコーヒーの木が戦禍を免れたことで野生化して代を重ね、約80年後の現代に生き残っていたという「夢の物語」である。まさに自然の奇跡の

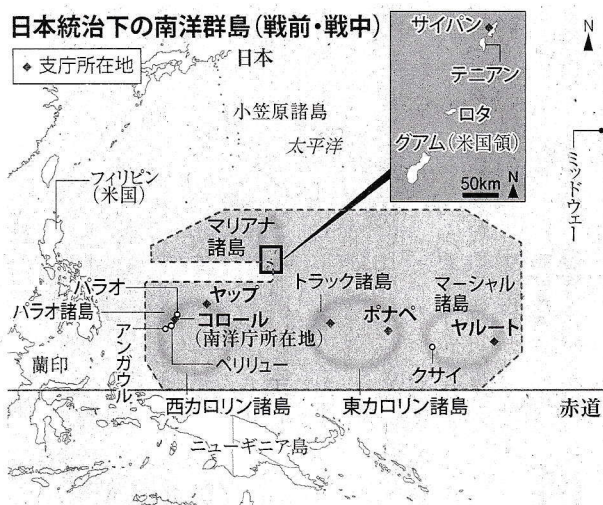
バトンを受け取る

自然の神秘の前には、ちっぽけな人知など、及ばないのかもしれない。ロタ島のコーヒートの「奇跡」。それは、日本統治時代に日本モロ人ら現地島民によってコーヒート復活のプロジェクトが始動する。取り組みはNHKBBSのドキュメンタリーでも放映された。

南と北の

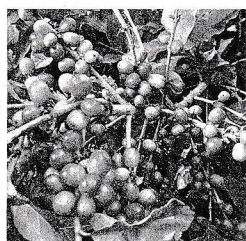
島物語

樺太と南洋統治

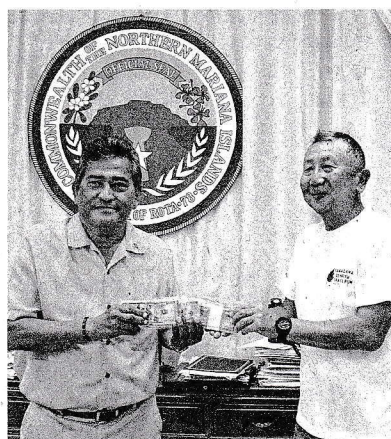


【36】

80年前のコーヒー「奇跡」のリレー



赤く色づいた口々
島のコーヒーの実



ロタ市長にクラウドファンディングで集めた資金を渡す大西喜代一さん⑤
(写真はすべて大西氏提供)

最初に「扉を開けた」の
スロンの大会も、17年を最
は、大西喜代一（71）であ
後に開催中止に追い込まれ
る。ちなみにコーヒーとは
てしまう。

「何とかして島の経済を再活性化させ、もう一度、トライアスロンの大会を開きたい」。大西は、かつてこの島でぐちそうになった島産の1杯のコーヒーを思い出す。「ふと、ひらめきました。『農業』で島の経

ところが2001年の米中核同時テロ以来、航空需要が落ち込み、この地域への路線撤退が相次ぐ。ついにはロタ島への定期便運航が廃止され、観光収入をメインとしていた島の経済は大打撃を受けた。トライア

済を復活させられないか？

ロタの市長に「島のどこかにコーヒーの木があるはず。探してみないか」と話を持ち掛けたのです」

それは「雲をつかむような」話だったが、長年にわたる大会開催の実績があっ

た大西には島に人脈があり、信頼もされていた。少数でゆっくりとだが、市役所のプロジェクトが動き始めたのである。

日本が植えた木だ
それから約1年後の18年
6月、市役所の担当者が島の
最高峰、サバナ山中腹の

ジャングルでコーヒーの木
の跡だったのである。

高いポテンシャル

世紀以前のスペイン統治時代にコヒーを栽培していたことを記録した文書が見つかり、プロジェクトは沸き立つ。だが、どうもおかしい。スペイン時代のコヒー栽培の痕跡も見つかった。俄然、市役所のプロジェクトも本気になった。自生地から採取した実から苗木を育て、今は別に確保した公営地に新たな畑をつくつて、数千本のコヒーの木を栽培している。

ていたが、海岸付近にあった。ここでも、もうひとりの日本人が登場する。コーヒーの農事分野のスペシャリスト、UCC上島珈琲の農事調査室長、中平尚己(55)だ。大西の依頼でロタ島の群生地を訪れた中平は、この森の中に生えるフォレス

大西はクラウドファンディングで資金を集め、サポート。後には本国アメリカから補助金も付いた。中平によれば、製品化には「5年はかかる」といい、まだまだ課題も多いが、今や関係者には希望の方が強い。それは、「品質の高さ」と「希少価値」だ。

トコーヒの木や葉を見て
 “ある可能性”に気づく。
 スペインではなく、かつて
 日本統治時代に日本人がハ
 ワイから持ち込んだコナ・
 コーヒーに似ているのでは
 ないか？

採れた少量の実を焙煎し
 て試飲した中平は「柑橘系
 のフルーティーさ、酸味や
 心地よい甘みもあり、ポテ
 ンシャルは高い。島のコー
 ヒーは、少量生産にならざ
 るを得ないが、半面、個性

があり、それが付加価値になる強みを持っていると思います」と言う。

中平は「奇跡のリレー」で受け継がれ、新たに生まれた島のコーヒーを大西のトライアスロン大会名にちなんで「ロタブルーコーヒ

「」と名付けた。大西と中平の思いは、事業化に成功し、島の名産となったコーヒーの姿を見届けることである。

敬称略

（編集委員 喜多由浩）

隔週揭載